

人を惹きつける“まち”とは
北陸はイタリアに何を学ぶか

視座

6



陣内 秀信

(法政大学工学部教授 / 工学博士)

1947年福岡県生まれ。東京大学工学部建築学科卒業、同大学院工学系研究科(建築史)修了。イタリア政府給費留学生としてヴェネツィア建築大学に留学後、東京大学助手、法政大学助教授を経て現職。また、パレルモ大学、トレント大学の客員教授も務める。

イタリア建築史・都市史が専門だが、それぞれの都市の記憶、歴史などを通して、その魅力、活力、あるいは独自のメカニズムを分析・論評する建築・都市研究者としても知られる。江戸と東京との密接な空間構造を解明・著述した『東京の空間人類学』でサントリー学芸賞を受賞。“江戸”ブームの火付け役の一人でもある。『都市を読む・イタリア』、『都市と人間』、『ヴェネツィア 水上の迷宮都市』、『イタリア 小さなまちの底力』など著書は多数。

*1 ラテンの国々

古代ローマ帝国で使用されていたラテン語から派生したといわれる、イタリア語、フランス語、スペイン語、ルーマニア語など(これらをロマンス語という)を、母国語とする国々のこと。

*2 多自然居住地域の創造

平成10年3月に閣議決定を受けた全国総合開発計画「21世紀の国土のグランドデザイン」では、これからの国土づくりの戦略の一つとして、「多自然居住地域の創造」を掲げている。同計画では多自然居住地域について、次のように記述している。「中小都市と中山間地域等を含む農山漁村等の豊かな自然環境に恵まれた地域を、21世紀の新たな生活様式を可能とする国土のフロンティアとして位置付けるとともに、地域内外の連携を進め、都市的なサービスとゆとりある居住環境、豊かな自然を併せて享受できる誇りの持てる自立的な圏域として、『多自然居住地域』を創造する」

これからは“まち”や“地域”の魅力が重要になる。 イタリアの地方都市の鮮やかな再生に学びつつ、 北陸もクオリティの高い地域づくりを進めるべきだ。

変容を求められている日本の都市
これからのまちづくりの参考事例がイタリアにある

今、日本の都市は変容している。

日本でも活躍しているフランソワーズ・モレシャンさんが、あるシンポジウムで「日本の都市はラテン化しているのではないか」と指摘したことがある。実は私も以前から同じように考えていた。

例えば最近の喫茶店の作り方を見ると、建築(店舗空間)と都市を結びつけようとか、店の外部空間に魅力を持たせようとか、カフェテラスを出そうといった方向にある。こうしたことは、フランスやイタリアといったラテンの国々の都市が、これまで行ってきた事にほかならない。

フランスやイタリアの都市は、蓄積された文化が建築や景観などまちの表面に出てくることで形成されている。だから独特の趣きがあり、それが魅力や個性につながっている。それに対して、これまでの日本の都市は機能や効率性を重視したこともあって、画一的で個性に乏しかった。金沢のように、江戸時代からの地域文化の蓄積が反映されたまちは非常にまれな存在だ。

しかし、日本もようやく経済的に豊かになり、これまでの文化の蓄積を素直に表に出そうとし始めているようだ。モレシャンさんのいう「ラテン化」はそうした動きの1つの現れと見ることができる。

一方で日本の都市は、解体が進行しているのではないかという不安がある。全国どこを訪れても、中心商店街はさびれて閑古鳥が鳴いている。都心の夜間人口はどんどん減っている。盛り場も何か淋しげだ。逆に、郊外の国道沿いは賑やかで人通りも多いが、大型ショッピングやパチンコ屋ばかりだ。

中心市街地の再生や多自然居住地の創造²など、これからの地域づくりをめぐる、さまざまな議論が始まっているが、都市の再生そして魅力的なまちづくりに関して、日本はイタリアの都市に学ぶことが多い。

歴史・文化の集積と急速な経済成長 共通点の多い日本とイタリア

日本とイタリアは国土面積が同じくらいで、人口が稠密(ちゅうみつ)急速な近代化など共通点が多い。古代から国の歴史を有することや、20世紀において、第2次世界大戦の敗戦から復興し、高度経済成長を遂げたという点でも類似している。

イタリアでも、1950年代から60年代にかけて工業化が大都市を中心に進行し、